

曇^後晴^田に秋は汁粉 周 幽邃

もうすでに夜は、明けでいた。暗闇と水銀灯の行進に慣れた目には、その街の城趾は平ぼろしく落ちついたグレイを見せる。

その空は青く、雲は重く動めりている。耳には、礎にまたタイヤの回転音がひびりてくる。

突然の始発電車の^笛の音が合図である。左か右のように向き返った街を出発し、峠への路をたどり始めた。

席ぐに登り始めた道は、川と鉄道にはさまれ、どうしようもなく真直ぐに伸びていく。彼の足は、暑早、情性でのみクランクを回転させているし、ペダルは、キリヒかかっている。彼の足がふる位置に来た事を恐しく正確に告げている。

ここではまだ木々は、緑の葉を残しているものの、風の早利木木はおしゃまな女の子のようは、着かざっている。

さわやかなてはあるが、何となくあたたかい空気に感謝し、ふと下まじしかつかなり、マキンを呪いつつ、ふと見上げた景色のほんの一部分が先に入った車や、バス停が居ここちさよさぞうも事を理由に、何處も休み、汗をふき、再び走り、ほろの悪さを嘆きつつ、次の休みの理由を考ふる。

いくつかの温泉街を過ぎ、おしゃまな女の子がふたて来て、小さなカーブがその先の路をかくす。

かつて、観光バスで雇った車のあつた道ではあるが、かすかな街

片さえも今見ている、エンジンと重なったとしても小さくはあ
り決定的な異を感じられる。

突然現れた、大きなカーブの先は、分れ道カ姿を現わし、右の
道は、再び、ゆりゆりが右左きの、糸を引いたような直線の道であ
った。外輪山の内側のせまり平地を峠に向って、重くのしかかる
雲に方向をまわりつつ、ゴルフ場や別荘地は呪いをかけ、それらが
周囲に見えなくなった時、ブレーキをかけた、足ことの、自然
に止まるにまかせ、その止まるまでの間、得をした気分になつて
止まると、止まったのだからという理由で休み、水を飲む。

再び分れ道に出会い、今度は、新しくトンネルの開通でもはや
あまり使われなくなった旧道へ向け、左に折れる。

旧道に入ったとたん、どこに残っていたのか、多少元気が出て
来て、足の回転数が上がる。小さなカーブの連続と、ほど良い坂と
心から楽しむ。ガスでその先は、見えなけれども戻つてしつと
りとした落ち着きを見せる。

ふと、赤い屋根のひかえ目な建てものか、目上うつつ。谷側に
しがみついているその建てもの向うに、クラシカルなスタイル
のトンネルが見える。

ローイブインと云うには少し小さな建てものは二つかり二つ、
います。へちま二つで、さ、とかへのメニューと目を走らせる。

「本のー、しるこ下まわり」

だりたり朝の九時に開店したばかりのこの店に一人で二つかり

こんでしてしるこを注文する。ニッカーホーアの男をその店の欠
ちヤンガじろ思ったか知らなれど、それほど不思議な顔
もせず、はしと塩こんで出して来た。

塩こんでが、しるこにつく事を知らなれその男は、多少ぎもん
に思ったものの無気力のかたまりのよろな顔をしてそれをながめ
て待たせている内に、西山に塩がつくのがからもう事もあるな
らうと思つて納得したか、もしかしたらせけ茶づけが存んか出て
くるんじやなからうかと思つてそれをも納得した。

一応心まなのでもう一度かべのメニューを見て、鮭茶づけがな
いのを確かめて塩こんでにらめこをする。

どうやらしるこが出来てくるまで、塩こんでをたべようという欲
求をおさえてこんで、一応神士的に、しるこ及び塩こんでを食べる
事に成功する。食べた後、三田峠の頂上でしるこ屋を開いた事
でかいはんじよるするだるうなじと考へた。

空が晴れて来た。

彼がもう一杯しるこを注文した事は言うまでもない。

